

カナリアの飼い方

山口大学農学部 早崎峯夫

カナリアはカナリー諸島の名前に由来し、その鳴き声のすばらしさと毛色の綺麗さからイギリスで愛玩動物として飼われ始めた。イギリスでは18世紀の産業革命の時期から愛好家が増え、この風潮は比較的郊外の方が強かった。次第に、カナリアの繁殖と売買が商売となり、ビクトリア女王時代早期には、愛好家によって、歌声のよい血統が競い合うようにして確立していき、カナリアはビクトリア王室に欠かすことが出来ないものになった。こうして、こんにちでもなお、カナリアは世界でもっとも愛されている愛玩鳥の1つとして楽しまれている。

カナリアの選び方

カナリアを選ぶ際、雌雄の判別がつくのであれば、雌を選ぶようにするとよい。これは、雄よりもコストがかからないし、鳴き声も無いかまたは大変小さいからである。雌の中には優しくさえずるものもあるが、雄のように頭を高く上げ、のどを振り絞って元気よく鳴くということは無い。新しく購入した時点では雌雄が判別できなかった場合でも、購入後鳥を2~3日休息させ、この期間に鳴き方で雌雄が判断できる。

カナリアは、ボーダーファンシー、ファイフファンシー、グロスター、レッドファクターまたローラー、およびその雑種などの小型の品種が愛玩用に最も適している。このため、多くの繁殖家がこの種類を生産したので価値が下がってしまった。今日ではペットショップ等で売られている種類は数種の血統が主流となっている。カナリアの繁殖期は春から夏で、換羽期は晩夏から初秋にかけてである。カナリアを購入するのに一番良い時期は換羽が終わった時である。年齢的には3~5ヶ月齢のものがよいが、もしその時期を逃してしまった場合でも青年期の鳥を選ぶのがよい。したがって、カナリアの購入は充分若いものを選ぶ。

カナリアの平均寿命は7年から9年である。年齢に関する明確な指標は無いが、脚の状態や、年ごとの成長度合い等で判断することができる。健康な鳥は羽根が綺麗でピンと張っており、眼が輝いており、活動的である。羽根が貧弱であったり、肛門が地面にくっつくほどに弱々しくたたずんでいるものは避けるべきである。

鳥かごの選び方

鳥かごは、カナリアの一生の住いになるものであることから、その選別は重要である。鳥かごはシンプルで広々としていて、掃除のしやすいものを選ぶ。大まかに言えば、針金で出来ていて長方形で背の高いものが好まれ、さらにはセキセイインコやそれに近い種類の鳥の飼育にも役立つような昇り棒が備わっているものも好まれる。つまり、最低限の条

件として、外開きのドアがついていること、飼い主の手がケージの内部全体に届く程度の広さであること、また、止まり木の両端には水や種のエサ入れを備えて、鳥かごの床は掃除しやすいように容易に取り外せるものが良い。鳥かごには鏡やおもちゃといった娯楽道具は必要ない。カナリアは環境に適応しやすい鳥であるが、気温や湿度の変化には適応しにくいので、鳥かごは、ドアから離れた部屋の隅に置いておくか、かつるしておくのが良いが、直射日光があたるようなところは避ける。冬の午後などは鳥かごに布カバーをかぶせて暗くしたり、人工的に光を当てたりするのが良い。

給餌と健康管理

主食は種子類である。ただし、健康を維持するためには水と種子だけでは充分ではない。また、どの種子でもいいというわけではなく、ホワイトスパニッシュ 4 に対してラブセン 1 くらいに種子を混合したエサが健康にいい。ホワイトスパニッシュはカナリアシードとも呼ばれ、卵形をしているものは炭水化物が豊富であるが脂肪が少なく、それに対して赤みを帯びた色をしているものは脂肪が十分にある。このような混合種子は常に与えておく必要がある。カナリアは、いろいろな栄養素が必要なので、他の種子も与えるほうがよい。種子は実入りがよく、触感、匂いの良い、新しい種子の製品を選ぶ。それに加えて、カナリアはクレソンやレタスといった野菜類を大変好む。また、芝や雑草の種子を与えるのもよい。雑草で一番好むのはタンポポの種子、ハコベ（草全体）、ラットテイルズの種子などである。どんなエサでもほどほどに与えることが重要で、新鮮である必要がある。冬には、ニンジン、リンゴ、キャベツなどがとてもいい代用食になる。

カナリアは時々柔らかい食べ物を好むこともある。ソフトフード製品は、基本的に、ビスケットの粉にタマゴや牛乳を加えてビタミンを強化したものである。ドライ製品で水で戻すタイプの製品もあり、これにハチミツやミネラルを加えたものや、また直接与えられるように固形になっているものもある。カルシウムは骨を構成する上で大変重要であり、イカの骨を鳥かごの格子にワイヤーで固定して、ついでに与えるようにして与える。給水は冷たい水を水容器からいつでも自由に飲めるようにしておく。

種子の消化をよくするために、砂を与える。それは固まりになった製品でもよいし、綺麗な海や川から砂を取ってきて、それを十分に洗ったものでもよい。小さな底の浅い容器に砂だけを入れて、餌の容器と並べて置いておく。

毎日エサの世話は、決まった時間に行い、古いエサを新しいエサに取り替えてやる。それは早朝にやる。できるならば、種子は与える前に皮むきして与えるとよい。水入れは毎回中を洗ってから新鮮な水を入れて与える。たとえば、2、3 日間種子を与えたら、つぎの 1 週間くらいはソフトフードを与えると良い。カナリアは学習能力が高いので、たとえば、ひとの手でハコベやタンポポの頭（種子の部分）を直接与えるようにすると、飼い主に對する信頼度を高めてくれて、ひとの手からエサを食べることをすぐに覚えるようになる。

カナリアには水浴びが必須であるので、冷たい水が半分くらい入ったやや大きめのプラ

スチック容器を鳥かご内に入れてやるのがよい。この水は1週間の2回くらい取り替えれば十分である。カナリア水浴び後、くちばしを使って身体を乾かすので、カゴの床に敷いた敷料（新聞紙など）は取り替えて、また砂も砂入れに十分に満たしておくことが重要である。止まり木は1週間に2、3回取り出してよく洗っておく。鳥かごの檻の格子も時々よく洗ってやる。ただし、カナリアは縄張り意識が強いので、カゴのなかに急に手を入れたりすると激しく攻撃するので、鳥かごの掃除は手荒らに行ってはいけない。

換羽期と健康管理

健康でカナリアは、秋に換羽期がある。したがって年に一度の換羽期に飼い主が気をつけなければならないのは皮膚のケガである。自然な換羽は晩夏に始まり、古い毛が徐々に抜け始め、新しい毛に変わっていく。しかし、カナリアを新しい毛が生え変わるまでおとなしく過ごさせるのは難しい。換羽期には種子やソフトフードや野菜などを与えると羽根の色の深みが増す。鳥がみずほらしくみえる間、雄鳥が鳴くのをやめたりしても健康に支障は無いので心配はいらない。したがって、水浴の回数を減らす必要は無い。

換羽期以外に換羽が見られた場合は、体調に問題があることを意味する。主な原因としては、まず気温の急激な変化や人工的な光の浴びすぎが上げられる。これは自然の換羽期よりも遅れて換羽が始まったり、換羽期間が長引いたりする。この場合、鳥かごを直射日光を避けることのできるような窓のそばに移動してやり、栄養のバランスが取れた給餌をすれば改善できる。

羽根が傷ついているような場合はその原因を取り除く。また、足を骨折している場合は添え木を当てて隔離して安静にしておく。時々鳥かごの格子などに脚を引っ掛けて、捻挫したり爪を折る場合があるので注意する。また、月日が経つうちに爪が伸びてくるのではさみや爪切りで切ってやる。爪をきる時に注意することは、明るいところで爪をよく見ると、爪の根本から先端に向かって、深部に赤い部分に走っていてここには静脈と神経がきているので、ここから先端方向へ2、3mm あけて、爪の白く見える部分を切り落とすようにする。

カナリアは内部寄生虫がうつることはあまりないが、外部寄生虫のダニにうつることは少なくない。これらには2つのタイプがあり、皮膚に住み付いて皮膚を食べるものと、日中は鳥かごのすき間や止まり木の割れ目に潜んでいて、夜になって鳥の血液を吸うものがある。もし害虫が見つかったら速やかに鳥に害を与えないダニ殺虫剤で駆除処置を行うべきである。そのときは、鳥はもちろんのこと、鳥かごおよび鳥かごを置いたり吊るして場所の下床面一帯も徹底的にダニ殺虫剤を撒く（あるいは噴霧する）。ダニのような下等動物は一度にたくさん産卵するので、ダニ自体のみならずダニの卵にも注意しなければならない。もっとも、ほとんどのダニ殺虫剤の製品はダニには効くが卵には効かないので、ダニ駆除処置は1週間間隔で2-3回繰り返して実施するのがよい。これは、ダニが卵から生れるのを待って駆除するものである。ダニがいったん住み付くとその完全な駆除はなかなか

か難しいので、自己判断でダニ殺虫剤を購入して鳥を危険な目に合わせたり、完全に駆除したつもりでも不完全な結果に終わることが少なくないので、鳥専門の獣医師の診察と指導を受けた方がよい。そのほうが適切な駆除処置が行えて、結局は安全に駆除できて経費的にも安くつくことが少なくない。

繁殖

繁殖させるには様々な準備が必要である。彼らが安心して身を隠せるような巣が必要で、特に繁殖用の部屋や小屋があるとよい。特別な暖房器具などは必要ないが、南側で日当たりの良い場所がよい。最も適しているのはダブルブリーダーと呼ばれる木製の鳥かごで、正面のみが格子で、天井、床、左右と奥の壁面は板で囲ったもので、大きさは、おおよそ横 36 センチ、奥行き 36 センチ、高さ 38 センチ程度のもので、これを 2 つ横に連結させて結合し、連結部分に仕切り板が挿入できるように細工しておき、この仕切り板を入れたり出したりすることで、2 部屋にもなり、横長の 1 部屋にもできるというものである。それぞれ餌を食べる時は仕切りを入れて両者を別々にし、ペアリングさせるときは仕切りをはずしてやる。既製品の巣を奥の壁に設置してやると、雌はそこに草や干草、毛織物などのやわらかい材料を運んできて巣を整えるので、フェルトを切って雌が作った巣の中に入れてやるのもよい。巣は 2 週間位で完成し、雌は鳴き始め、そして 4, 5 個の卵を産む。卵は三日目くらいで孵化しはじめる。もし雄が邪魔するようであれば、仕切り板を入れて、雄を隣の小屋に隔離する。雌は常に座り、巣を離れるのは餌と水を摂るときだけである。卵の孵化は昼の 12 時くらいに始まる。もし気温が低いときや雌が巣を離れることが多くて抱卵時間が短いときは孵化はさらに 2, 3 日かかると思ってよい。餌は柔らかい物を与える。例えばビスケットの粉であったり、硬ゆで卵であったり、療養食のようなもの、肝油を種にまぶすのもよい。さらに言えば、これらには形が崩れてしまうくらいの量の水を混ぜておくのがよい。もし、3, 4 ペアが繁殖しているときは、餌は朝昼晩と与えた方がよい。

生まれて 2, 3 日の雛は一度に少ししか食べないが、何度も欲しがらる。しかし 5 日目くらいになると母鳥も巣から離れている時間が多くなるので、空腹を満たしてやるためにハコベや熟しきる前のタンポポの種子の部分などがこの時期一番必要である。水に浸した種子を 1 日 1 回与えることによる栄養補給が効果的である。種子はざるに入れて少なくとも 24 時間は冷水にひたす。8, 9 日齢になると雛の糞量も増えるので、親鳥は巣を清潔に保つために雛の糞をせっせと掃除するようになる。

糞は、暖かい日には腐敗してすっぱい匂いを発する。そこで、床に砂を撒くなどして、腐敗を防いで清潔にしておかなくてはならない。19 日齢にもなってくると姿形が親に似てくる。そして飛べるようになると、巣に戻るのを嫌がるようになる。この時期あたりから、雌親は 2 つ目の巣つくりに入り、雄親は餌を運んでくるようになる。この 2 つ目の巣つくりのときに、雌は大きくなった雛の毛もむしりとることがあり、雛はそれを嫌がるようになるので、雛は 21 日齢には巣から離してやり、別の鳥かごに隔離すると良い。巣を作るの

にはできるだけ多くの羽毛が必要だが、急に必要な時、雌は自身の毛を使うこともある。

この時期の雛は、血統毎にケージに分け、止まり木の位置を下げ、床にはたくさんの乾いた砂を撒いておく。これ以降、餌は乾いた種子の割合を増やし、柔らかいものは少しずつ量を減らしていく。こうした乳離れの時期はだいたい最初の換羽が終わる頃である。ただし、そうはいても、幼若なカナリアはまだ体力もなく病気や飢餓に対しての抵抗力も無いということを忘れてはならない。

品評会

カナリアは種類、サイズ、形から選ばれる。人気があるのは、ヨークシャー、リザード、ノーウィッチ、ボーダーファンシーなどの種類であり、これらは原種のカナリアから品種改良を重ねて発展したものである。多くの国に、カナリア協会があり、常に各品種の標準品種の維持に努力が注がれてきている。この協会の下には多くの下部組織や地方組織が所属していて、研究発表会や品評会を頻繁に開催している。品評会は国際大会くらいになると 6000 羽ものカナリアが参加する。

～タイプカナリア（体型を楽しむカナリア）～

体型を楽しむカナリアとは、毛色や毛並み、あるいは鳴き声や容姿を楽しむよりも、体型を楽しむ種類を指す。この品種が一番多く、全てがイギリスから発祥している。毛色は最も重要な要素ではないものの、しかし年齢や性別とともに、品評会では重要な判定点とされ、明るい色か、まだら模様か、単色かななどで評価される。原色イエロー(buff)のカナリアからは改良されて、シナモンイエローの斑点を持ったカナリアと青みがかかった灰色の斑点を持つ白色カナリアが作り出されている。このように毛色は明るい黄色から明るい白色までの間に、グリーン、シナモンイエロー、青まだら、深いダークグリーン、そしてブルーバード（単色）の様々な色合いが見られる。

“ボーダーファンシー”は、カナリアとはこのような鳥であるべきであるという概念で分類されている。すなわち、サイズは中位で、動きが機敏で、通常明るい毛色か光沢あるまだら模様を有するものを良しとしている。しかし、品評会では競争が激しく、審査は小型か、体型が丸いか、均整のとれた頭部か、首の長さ、背の立ち上がりの状態、豊かな丸い胸か、などが問われる。翼が体側に密着するように折りたたまれていて、尾がしっかりと重なり合っているかが審査される。毛並みの質と毛色の深い色合いは重要な審査点である。また全体的印象として、プロポーションが美しく、生き生きとしていることが重要である。

“ファイフ（横笛）ファンシー”は、ボーダーファンシーが余りにも大型になり、旧名を WeeGem という名前を使わせたくないと感じた愛好家たちによって、1970 年代に改良

された新種である。ファイフファンシーは単純に言えばボーダーファンシーの小型版で、特徴点はほぼ同じである。毛並みの質と良い毛色の深い色合いと良い、きわめて美しい鳥で、まるで宝石のようにみんなを魅了してくれる。

“ノーウィッチ”は愛らしいボーダーファンシーやファイフファンシーと違い、丸々としたプロポーションを良しとし、動きも穏やかである。頭は幅の広く、首は短く、ずんぐりむっくりした丸い体型が好まれる。そして尾は短く、羽根は直立不動型が良いとされる。ただし、たとえよい体型をしていても大きさが16.5センチを超えてはならない。ノーウィッチの羽根の色はオレンジと黄色が伝統的に品評会で好まれる。

“ヨークシャー”は直立型で堂々としていることから、ジェントルマン オブ ザ ファンシーとかガーズマンという名前がつけられている。ヨークシャーはスリムなものが良いといわれており、指輪が体をくぐり抜けるくらいスリムなものがよいという言われ方をするほどであった。しかし近年では頭部は広く、肩も広く、そして羽根が滑らかなものが求められている。また体長は20センチくらいで毛色はノーウィッチのような色が好まれる。

～クレスティッドカナリア（かんむり状の羽毛を楽しむカナリア）～

すべてのクレスティッド（とさか）カナリアは、頭頂に円形状で放射線状のかんむりをかぶったような羽毛を持つのが特徴である。これは純血ではなく、とさかのあるものと無いものを掛け合わせたもので、半々の割合でとさかを持つものが生まれてくる。

“ザ クレスト”はビクトリア女王時代の末期に、“ファンシーカナリアのなかのキング”といわれ、20世紀に入って広まった。現在ではそれほど広まっていないが、大きな垂れ下がったかんむりとノーウィッチのような体型がよしとされている。展覧会用には、ザ クレストテッドの羽根はあまり長いのは好まれず、そしてかんむりは眼の下まで垂れ下がりくちばしを覆うくらいまで伸びたものが好まれる。クレストテッド系カナリアは体が大きく、頭部の羽毛が長毛で、シルキーあるいは暗いブラウン系の羽毛をしている。羽根の色や毛質はこの品種では相対的にほとんど重要でない。

“グロスターファンシー”は広く好まれ、現在さらにその数を増している。しかし最近では小形のもものが好まれ、こざれいなトサカを持ち、はっきりした眼を持つ。体型も重要で、上品で活動的な小型のもものが好まれる。クレストテッドグロスターは“コロナ（光冠）”と呼ばれ、とさかの無いものとの交配の“相手”として相性がよいことで知られている。

～シンギングカナリア（鳴き声を楽しむカナリア）～

“ローラー”カナリアは鳴き声に特化した品種で、他のどんな品種よりも高く甘い声

を持ち、その声によって評価される。この鳴き声は複雑な音色が含まれていて、フルート、バスなどの、まるでオーケストラの管楽器のような音を楽々と奏でてみせる。ローラーの繁殖家は鳴き声の持続するカナリアを作り出すことに情熱を傾けている。反対に色や形はあまり重視されない。

～ポスチュアカナリア（容姿を楽しむカナリア）～

ポスチュアカナリアという言葉はかつて容姿（姿勢や体型）が普通のカナリアと違うことを強調して名づけられた。現在ではそういうことはなく、ベルギーやスコットランドの愛好家が自分たちの国のカナリアをこう呼んでいる。この品種は血統が重視される。

“ベルギーカナリア”は古くからあり、18世紀の終わりからベルギーの町で発展した。“ベルギー”は肩ががっしりして頭は小さくてまっすぐ立っており、首は長く、体と尾が垂直に立っている背の高い品種である。活発に飛び回り、止まり木などにしっかりと止まることのできるものが良いとされている。

“スコッチファンシー”は、“ベルギー”の体型が直線的なのに対して、バード オブ サークルとして知られているくらい曲線的で、頭、首、体、尾まで一連の半月のように丸みを帯びており、頭と首は止まり木の前、尾は後方についている。蛇のような頭、スリムな体、細い足と尾が好まれる。また、止まり木から止まり木へはねるような元気さとまっすぐな姿勢が要求される。

～カラーダカナリア（毛色を楽しむカナリア）～

“レッドファクターズ”は、イエローカナリアと南アメリカのフィンチであるブラックフーディッドレッドシスキンの混血である。第二次世界大戦中に遺伝子的にレッドカナリアの純血種が作られた。しかしある程度は発展したが1960年代に深い赤やオレンジ、アプリコットカナリアが出るまではそれほどでも人気はなかった。今ではブリーダーによって様々な品種が作り出されている。

～フリルドカナリア（巻き毛を楽しむカナリア）～

ヨーロッパ大陸において巻き毛の翼を持つカナリアは多いが、全ての大陸で多いというわけではない。この種類の三パターンに分けられるがみんな同じである。“マントル”は羽根の後ろが左右対称であり、肩の長さも対称である。“フィンズ”は横の羽毛がカールして体に巻きついている。“クロウ”は羽根が胸のあたりでカールしている。“パリジャン”は最も大きい品種で、高さが20センチあり、直立して立ち、重もそうな羽毛を持つ頭部と脚部、そして長く巻いた爪が特徴である。ノースダッチはパリジャンを小さくして、かつ活発にしたようなカナリアで、頭部から頸部そして脚部にかけての羽毛が巻いてなく直毛で

あるのが特徴である。“サウスダッチ”は、羽毛はノースダッチに似ているが、直立姿勢はとらないものの、姿勢やポーズはベルギーカナリアの方に近い。

～パターンドカナリア（羽根のパターンを楽しむカナリア）～

タイプカナリアの繁殖家は、かつて、とにかく無計画にペアリングさせて生まれてくる種々のタイプの個体の中から規格にあった個体を良しとした。今日では、このようなことはほとんど行われていない。しかし“リザード”種だけは羽毛のパターンが固定されて血統に改良された。

“リザード”とその近種は、今では絶滅したが、ロンドンファンシー協会は、2種類だけ、人工繁殖に成功し、羽根のパターンを残している。それは、第一次世界中に絶滅の危機に陥った、スリムなボディと黒い羽根と尾を持つカナリアである。この“リザード”は黒い羽根と尾を持つが、頭部は明るい金色をしていて、キャップと呼ばれていた。背中は光かがやいていて、あたかも爬虫類のうろこに似ているほどである。

かつてはファンシーだったという確証は取れていないが、リザードは少なくとも150年間は変わらず、他のカナリアが持っていない頭や背中や黒い羽根などの独特な特徴を備えていった。つまり他の種類との配合は一切無かった。展覧会では一歳鳥は評価が高いが二歳鳥は黒い羽根に灰色が混ざってくるので評価が下がる。

鳥小屋

カナリアの鳴き声と美しさを保つためには鳥小屋が必要である。夏の間だけなら主な材料としてワイヤーネットとワイヤーメッシュを用いればかなり安上がりで済み、屋根とサイドにカバーをつければ雨からも守ることができるが、しかしオールシーズンの鳥小屋であれば霜用シェルターなどを作り、悪天候から守る必要が出てくる。ただし、いずれにしても、日当たりを良くすることが重要で、木の枝がかかったりしてはならない。

違う種類の鳥と飼うのならば広さが必要である。春に繁殖させようとするには安心して巣づくりできるように配慮する。そこでは繁殖のコントロールは出来ないが、雄と雌の割合を1：3にするように配慮してやる。そして巣にはカバーをかけてやることも必要である。鳥小屋への外敵の侵入にも配慮する。

床は砂利などを引いて常に清潔にしておく。また、暴風雨などを避けるにはコンクリートのようなもので土台を固めるとよい。もしも背の低い木や植物が小屋にかぶるようであれば、それらを除去するか植え替えておく。つる植物などはワイヤーを伝って伸びてくるので、中に引き込んでやると良い。これは覆いにもなり、昆虫も入り込みやすくなるので、鳥たちの餌にもなる。

小屋の外壁の最下部分は30cmくらいの幅広の板を土中に縦にして埋め込み、少なくとも、板は床面から22cm以上出て、土中には7.5cm以上埋るようにする。これによりバツヤ

コウロギ、あるいは土中から入る虫類を侵入を防除でき、ネズミの侵入に対してもシェルトー的な働きをする。